論　文

中国古典文学史における権力制度と詩歌の関係性
――元代を中心に――
The Interplay between Power Structure and Poetry in Classical Chinese Literature：
Focusing on the Yuan Dynasty

賈　亦実（大東文化大学大学院アジア地域研究科博士後期課程）
JIA YISHI

Abstract

This study examines the interplay between power structure and poetry in classical Chinese literary history, with a focus on the Yuan Dynasty (1271–1368). Challenging traditional narratives of cultural continuity or rupture under Mongol rule, it reveals how institutional frameworks—such as imperial rituals, civil examinations, and bureaucratic systems—shaped poetic forms.

The Yuan era is reinterpreted as a critical juncture where Han Chinese poetic traditions interacted dynamically with non-Han cultural expressions. Key institutional factors include the Kui zhang ge Academy, the semu hierarchy, and grassroots poetry societies. Interdisciplinary analysis of administrative documents, examination protocols, and multilingual steles demonstrates how Mongol imperial innovations reconfigured poetic spaces, fostering transcultural creativity.

Notably, Yuan poetry redefined Han literary norms through cross-cultural fertilization, exemplified by Wang Mian's ink-plum poetry and Yang Weizhen's experimental prosody. The research critiques earlier scholarship and proposes a new paradigm of "poetics of coexistence," resonating with modern multicultural societies and offering historical insights for globalized cultural studies.

1．序論

本研究は、中国古典文学史における元代の文学的様相を、多民族共存の視点から解明することを目的とする。

従来の詩歌と政治に関する研究では、文学表現と国家制度の具体的関連性の掘り下げが不十分であった。近年、両者の関係に着目する動向はあるものの、元代の統治機構と詩学変容の連関を体系的に論じたものは少ない。特に、詩歌が単なる社会情勢の反映にとどまらず、権力構造と相互に作用する「媒介」として機能したという視点が欠落していた。

モンゴル・色目・漢人など多様な背景を持つ詩人の創作実践には、言語政策や官吏任用、民族的・身分的区分といった制度的枠組みが、韻律構造や比喩体系に投射された痕跡が認められる。統治機構からの圧力とそれに対する詩的応答の相互作用を解読し、詩歌がいか

にしてその枠組みを越境し、再定義していったのかを考察する。この作業は、漢文化中心主義を超えた多民族詩学の構築に不可欠である。

元朝の統治体制は詩学に多大な影響を与え、非漢民族詩人による新たな創作規範を誕生させた。彼らの作品は漢詩の形式を踏襲しつつ、独自の文化や価値観を反映している。本稿では具体的に、科挙制度や官僚機構、および四等人制下の社会的区分が詩歌形式に及ぼした影響を分析し、権力と文学の媒介関係を通じて詩学空間が如何に再編されたかを明らかにする。

1.1　研究の背景と目的

中国古典詩歌は、周代の「采詩官」制度[1)]に起源を持ち、古くから統治システムの一環として機能してきた。漢代における儒教の国教化や、唐代の科挙における詩賦試験の導入に見られるように、詩歌は常に政治権力と結びつき、「統治の知」や「抵抗の言語」として変容を重ねてきた。

元代においてもその連続性はあるが、非漢民族詩人による多様な創作活動が伝統的な漢詩の規範を根本から問い直し、再構築した点に特異性がある。本研究は、この歴史的背景を踏まえ、元代特有の権力制度がもたらした文学的革新の実態を解明する。

1.2　先行研究の動向と本研究の位置づけ

中国古典詩歌研究において、権力制度と詩歌表現の関係を解明する試みは長年続けられてきた。初期の研究では詩歌を政治体制の反映や教化の道具とみなす傾向が強く、特定時代の詩人思想を制度から説明する手法が主流であった。近年ではこれに対し、詩の芸術性や作者の主体性を重視する視点が発展し、表現形式の変化や美的価値の変遷に焦点を当てた研究が深化している。

先行研究において、吉川幸次郎と前野直彬の研究は、元代詩歌史の解釈枠組みを構築する上で特筆に値する視座を提供している。これらの研究は、本研究が依拠し、また批判的に継承と発展させるべき基盤を形成している。

吉川幸次郎は『中国詩史』［吉川1967］において、「雅正」概念に据え、漢詩史を「士大夫の道統」という連続的枠組みで体系化する試みを展開した。この視座は、漢人士大夫の文化的正統性を軸に文学史を叙述する論理を提供した。しかし、元代というモンゴル帝国支配下の多民族社会において、この「雅正」概念をそのまま適用することには限界が生じる。吉川の枠組みは、漢人士大夫の精神的連続性を過度に強調する傾向があり、結果として、モンゴル・色目・漢人など多様な背景を持つ詩人たちの文化的越境や創造的混淆を、「正統からの乖離」あるいは「変調」として位置づけてしまう論理的問題を内在させてい

1）　采詩官制度は、古代中国の周代から春秋時代にかけて、地方の民謡や歌謡を収集して朝廷に報告し、政治の得失や民情を把握するために設けられたとされる官職・制度。集められた歌は『詩経』の「国風」の基礎となった。

る。本研究は、この「雅正」中心史観を相対化し、多様な詩的実践が生み出す新たな規範形成のプロセスに注目する必要があると考える。

前野直彬は『中国文学史』［前野1975］において、元代文学の「断絶性」を指摘した。その根拠は、科挙の長期にわたる停止（1237-1313）や、北曲（散曲・雑劇）の興隆といった、唐宋以来の文学制度と表現形式からの変化にある。この指摘は、元代文学の特異性を捉える上で契機となった。しかし本研究は、この「断絶」説に対して、制度的連続性と変容の側面をより詳細に検討する必要があると考える。具体的には、金代から元代へと継承・再編された制度的インフラの存在を考慮に入れるべきである。例えば、至元二十一年（1284）に設立された翰林国史院の機能は重要である。同機関では、多民族官僚による多言語文書の編纂・管理が国家事業として制度的に確立されていた。この事実は、政権の非漢民族性にもかかわらず、文書行政を中心としたある種の制度的連続性が存在し、それが詩文創作を支える文化的環境を形成した一因であったことを示唆する。したがって、元代の詩学変容を論じる際には、制度的「断絶」と「連続」が交錯する重層的な構造を視野に入れることが不可欠である。

その他に、赤塚忠の『楚辞研究』［赤塚1986c］が楚地の巫祝文化と中原詩法の融合過程を分析したように、地域文化の詩形への影響解明が進展する一方、詩的表現が地域勢力の政治的台頭に与えた影響に関する実証的検証はなお不十分である。同様に村上哲見は『宋詞研究』［村上1976］で宋代都市文化の発展と詞文学の新機軸の相関を解明した事例にみられるように、先行研究は詩の儀礼的側面や社会基盤との連動性に偏重し、詩的言語が持つ政治的媒介機能の解明が課題として残されている。

先行研究では元代詩歌の特性として、統治体制が生み出す文化複合性と、非漢民族文人による表現の多様性が指摘されてきた。だが最大の課題は、詩歌を政治や社会状況の単なる「反映」として捉える傾向が強い点にある。国家が設定した民族序列や身分秩序、例えば四等人制など、といった固定的な制度的枠組みに対し、多様な背景を持つ詩人たちが、異文化の言語や意象を表現手法に融合させることでその制度的境界を乗り越え、従来の漢文化中心認知や詩的規範を内側から解体し、新たな文学的アイデンティティを構築していったという、文学実践の能動的な作用に関する考察が欠落しているのである。

そこで本研究は、当時の権力構造や社会的背景に対する歴史的考察と、詩歌のテクスト精読を交差させる新たな視座を提示する。具体的には、多民族社会における詩歌の媒介機能、統治機構と詩人集団の相互作用が生む表現の革新性、そして非漢民族文人の創作が制度的枠組みをどのように解体したかの三点を軸に分析を展開する。これにより、吉川の連続史観と前野の断絶史観を批判的に継承しつつ、詩歌が新たな文化的・政治的秩序を生成する機能した過程を明らかにする。

1.3　研究方法

本研究は、政治権力構造の分析とテクスト精読の研究方法に基づき、中国古典詩歌の発展、即ち先秦から宋代における詩歌の政治文化を述べ、詩歌と政治制度を関連する基盤を

構築する。その上で、元代の特異な統治システムと詩学の相互作用を具体的に検証する。

次には元代詩歌と制度的文脈の相互作用を検証する。まず政治権力構造の分析を基盤として、『元典章』および科挙関連文書の分析から多民族詩人育成システムの構造的特質を導出する。例えば1321年の科挙改革を対象に、「策問」重視政策が漢詩創作と治国論を結合させた事実を解明する。この分析過程において、唐代詩賦取士制度との比較により制度的連続性と断絶性を対照し、モンゴル人官僚の宿衛登用制度の検討を通じて、草原文化の口承詩法が官僚養成システムへ浸透する過程を追跡する。これにより、遊牧的言語実践と漢詩制度の交渉関係を再構築する。

テクスト精読の手法を用いて多民族詩人作品群における文化接触の痕跡を抽出する。薩都剌『雁門集』所収「厳陵釣台図」の空間描写と、貫雲石『酸斎楽府』「西湖竹枝詞」の都市空間解釈を比較検討し、詩的空間認識における文化的差異を確認する。さらに『全元詩』の色目人作品群を対象に、「天馬」「穹廬」等の遊牧文化由来の意象が漢詩表現体系へ導入される過程を分析し、詩学描写対象の変容を実証する。

２．詩歌と権力：制度的基盤から文化的変容へ―先秦から唐代における詩歌の政治文化

本節は、元代における詩歌と権力制度の関係性を分析するための制度的な前提を明確にすることを目的とする。具体的には、詩歌が政治権力と結びつき、制度的基盤を形成と変容させてきた過程を、先秦から唐代に至り概観する。中国古典詩歌の伝統において、「詩」と「政」の関係が、表現主題を超えて、科挙や官僚登用、宮廷儀礼などの制度、あるいは唱和や応制、文人ネットワークなどの文化的実践そのものの核として機能してきた歴史的連続性を確認する。このような連続性の基盤の上に、元代という非漢民族王朝による支配、科挙の長期中断、多民族混交社会という特異な条件が、従来の詩歌と政治権力の関係にどのような変容の圧力をかけ得たのかを理解するための、対照的な枠組みを提供するものである。

したがって、本節の歴史的概観は、元代の特異性を浮き彫りにし、続く第四章以降で行う元代の具体的な事例分析を、中国古典詩歌史の文脈の中に位置づけるための不可欠な背景として機能する。

2.1　詩歌の起源と権威の構築

西周初期の祭祀制度は、王権の神聖性を言語的に構築する装置として、四言詩形を発展させた。この現象は、単なる文学形式の創出に留まらず、権力構造の可視化という重要な意味を持つ。『詩経』[2]周頌の「清廟[3]」篇にみられる「於穆清廟、肅雝顯相（粛穆たる清

2）中国最古の詩歌集で、西周初期から春秋中期（前11-前6世紀）の詩305篇を収録。「風」「雅」「頌」三部構成。賦比興の修辞法を駆使し、祭祀・農事・戦争など社会全般を反映。儒家経典として周代社会制度及び文学起源研究の基本史料となる。

3）西周祭祀制度の核心施設を指す。『詩経』周頌に「於穆清廟」とあるように、「清」は祭祀空

廟、厳粛にして和やかなる顕相)」という四字句は、西周青銅器「大盂鼎」銘文の「丕顕文王、受天有大令（丕顕なる文王、天より大命を受く)」」と韻律構造を共有し［松丸道雄1980：204］、上古音再構による音韻分析からも、その関連性が裏付けられる。殷商時代甲骨文[4)]における不定型三・四字混在体から、大盂鼎銘文の厳格な四言定型への移行は、祭祀言語が「口頭引述から文字記録へ」と移行し、音韻的権威を再編した過程を反映する。この過程は、文字による記録が、口頭伝承の曖昧さを排除し、より強固な権威を確立する上で重要な役割を果たしたことを示唆する。

また、甲骨文における「帝」への祭祀記録「甲午卜、貞：翌乙未侑于祖乙、用（甲午の日に卜い、貞う：翌乙未の日に祖乙に宥め祀らん、用いよ)」が、『詩経』大雅「文王」篇の「文王在上、於昭于天（文王は上に在り、ああ天に昭らかなり)」へと転化した過程は、祭祀権の王権集中を象徴する［白川1981：134］。白川は、この変化を、神への直接的な祈りから、祖先崇拝を通じた王権の正当化へと解釈している。この解釈は、詩歌が単なる文学表現ではなく、権力構造を強化するための政治的な道具として機能したことを示唆する。

2.2　律令国家の形成と詩歌の規範化

秦の法家思想は、韻文を法制度浸透の手段として活用した。嶧山刻石の「皇帝立国、維初在昔（皇帝国を立て、維れ初め昔に在り)」は、『商君書・賞刑』「国之所以治者三：一曰法、二曰信、三曰権（国家が治まる要素は三つある。第一は法、第二は信、第三は権である)」という統治理念を韻律化した事例である。工藤元男は、この韻律化政策を、法制度を民衆に浸透させるための視覚的・聴覚的な戦略として解釈している［工藤1998：167］。法律文書の文体が詩形に影響を与えた事例として、注目に値する。睡虎地秦簡『為吏之道』の四字句連鎖「清廉毋謗、審當賞罰（清廉にして謗り無く、審らかに賞罰を当たる)」は、官僚の文章訓練が文学形式を規定したことを示す。大西克也は、この事例を、官僚制度が文学形式を規定するだけでなく、官僚の倫理観を形成する上でも重要な役割を果たしたと解釈している［大西2015：123-150］。漢代楽府制度の原型となった里耶秦簡の民謡管理記録「朔壬寅、令史華監謁歌者（朔壬寅の日、令史華が歌者を監謁す)」は、『漢書・芸文志』「自孝武立楽府而采歌謡（孝武が楽府を立ててより歌謡を采る)」の記述を裏付け、口承文芸の体系化が「声教」という政治概念に基づいていたことを示す。

漢代経学の成立過程で、『詩経』注釈は官僚登用制度と直結し、『漢書・儒林伝』「(武帝）黜黄老刑名、延文学儒者」の政策下で、斉・魯・韓三家詩の相克は石渠閣会議（『漢書・宣帝紀』「詔諸儒講五経同異」）における博士官の地位争いと連動した。司馬相如の賦が駢儷体（『子虚賦』「僕対曰：唯唯。臣聞楚有七沢、嘗見其一」）と行政文書（尹湾漢

間の浄化儀礼（祓い清め）を、「廟」は祖先祭祀の制度化を象徴する。

4）　中国殷王朝後期（紀元前14-11世紀 ） に占卜記録として亀甲や獣骨に刻まれた現存最古の漢字体系。主に殷墟（河南省安陽市）から出土し、祭祀・天文観測・戦争等の社会実態を反映する。日本では松丸道雄『殷周史甲骨金文研究』や内山知也の日訳注釈研究が展開され、東洋史学・考古学の重要研究対象となっている。

簡「吏員簿」の四字句記載）に共通する修辞を発展させた事実は、文学表現が官僚的思考様式を形成した証左である。福井重雅は、この現象を、文学と行政が相互に影響し合い、官僚文化を形成した事例として解釈している［福井1988：157］。さらに武帝期の郊祀歌（『漢書・礼楽志』「太一貢兮天馬下」）が楚辞の巫系表現を儒教祭祀へ再解釈した過程は、『史記・封禅書』「（武帝）始立太一祠于長安」の記述と符合し、地方文化の中央統合が文学形式の再編を伴ったことを立証する。赤塚忠は、この再解釈を、儒教が地方文化を吸収し、自己の正当性を強化する過程として解釈している［赤塚1977：333］。楚辞「九歌」の巫覡歌舞描写は、包山楚簡（前316年）の「卜筮祭禱記録」に記された祭祀実態と符合する。赤塚忠は楚の「霊巫」職制が中原の「史官」体系と異なり、詩歌に幻想的要素をもたらしたと指摘する［赤塚1986：215-218］。

2.3　貴族制の変容と詩歌の多様化

後漢末の「郷論主義」は、地方社会における「人物評議（郷論）」を基盤とし、『後漢書』許劭伝に「月旦評（毎月の人物評定）」が「天下の権を執り、臧否を分つ」と記されるように、言論による社会的声望が官吏登用に直結した。この動態は『古詩十九首』（「青青陵上柏」等）にみられる隠喩的表現や、桓帝霊帝時の童謡「挙秀才、不知書」のような民間謡諺との相互作用を生み、詩歌が「声聞（社会的評価）」を媒介する場として機能した。松丸道雄が西周青銅器銘文との比較で指摘したように、韻文形式の定型化は、つねに人的評価システムと共振する［松丸1970：76］。この視座に立てば、魏晋期に「門地主義」へ転換すると、『晋書』衛瓘伝に「九品中正之制、尊世胄、卑寒士（九品中正の法、門閥を尊び、卑賤を軽んず）」とある通り、血統と家格が評価基準となり、詩歌表現も「家風の文飾」として再編される。曹丕『典論・論文』の「蓋文章、経国之大業、不朽之盛事（文章は経国の大業、不朽の盛事）」という宣言は、単に文学の自律性を説くのみならず、「文章」の審美性そのものが門閥貴族の文化的資本を可視化する装置となったことを示す。『文選』所収の応璩「百一詩」が「高門継世業、英俊沈下僚（高門世に重なり、英俊皆丘墟す）」と詠むように、詩的修辞の精緻化は、九品官人法における「状（人物評定書）」の文体と相互浸透し、潘岳「閑居賦」の「微名自釣于渭濱（微名を釣る）」という自己演出とも連動した。この自己演出は、貴族が自己の文化的優位性を誇示するための手段として、詩歌を利用したことを示唆する。

2.4　科挙制度と詩的表現の制度化

『唐会要』巻75が規定する「進士試詩賦各一篇」は、詩作能力を官僚資格の核心的基準とみなす画期的制度である。この制度が、①律詩の平仄規則整備、②「試帖詩」という官僚試験専用詩形の誕生、③白居易『新楽府』に代表される政治批判詩の言説戦略を並存させた点に注意が必要である。例えば、試帖詩の「賦得体[5)]」形式は、題意に忠実な解釈と

5）　中国の伝統的な詩歌形式で、古人の詩句や特定のテーマをお題として与えられ、制限さ

規範的表現を求める点で、「科挙答案としての詩的パフォーマンス」という新たな機能を付与された。近藤春雄は、この「詩的パフォーマンス」を、官僚候補者が自己の知識と技能をアピールするための戦略として解釈している［近藤2009：52］。

さらに、白居易が「新楽府」で展開した社会批判は、科挙官僚としての政策的視座（均田制の崩壊や両税法の矛盾）を詩的言語に転換したものであり、制度的課題の詩的媒介化という公共性を獲得している。川合康三は、この「詩的媒介化」を、詩歌が社会問題に対する議論を喚起し、政策立案に影響を与える可能性を示唆するものとして解釈している。このように、詩歌は官僚の政策的実務能力と思想的深さを測る「制度的リトマス試験紙」として機能した［川合2010：114］。

2.5　詩文能力と行政実務

唐代官僚の実務文書「判」に駢儷文[6)]が多用された事実は、詩文の作成能力が行政実務と不可分であったことを示す。杜甫「兵車行」の「信知生男悪（まことに男児を生むは悪しと知る）」という社会批判も、戸籍管理制度「武徳律令」への深い理解を前提として成立しており、詩人の制度的リテラシーが表現深度を規定していた。

例えば、元稹[7)]の「連昌宮詞」は、均田制の崩壊と府兵制の弛緩を、廃墟となった離宮の情景に重ね合わせて描く。この表現手法は、詩的アレゴリーによる制度批判として、科挙官僚の政策的洞察力を詩形に凝縮した事例である。興膳宏は、この「詩的アレゴリー」を、詩人が直接的な批判を避けつつ、社会問題に対する意見を表明するための戦略として解釈している［興膳1995：89］。また、敦煌出土の文書「進士答案草稿」には、駢儷文の修辞技法が行政判断「判文」に応用された痕跡が確認され、詩文能力と行政能力の制度的等価性を実証している。

小結

以上、先秦から唐代に至る過程を制度的視座から検討すると、中国古典詩歌の発展は、権力制度との絶え間ない相互作用によって駆動された文化再編のプロセスであった。詩歌は各時代の権力構造を可視化し、時にはそれを支え、時にはそれと緊張関係を生み出す装置として機能してきた。

れた韻脚を用いて作詩するスタイルである。唐代の科挙で試験詩として重視された「試帖詩（しちょうし）」の別名であり、しばしば五言排律（５字×８行以上など）という厳格な形式で、対句を駆使して詠まれた。

6）　中国の六朝～唐時代に流行した、四字や六字の対句を基本とした華美な漢文体。四六駢儷体、四六文とも呼ばれ、典故を多用し、リズムと形式美を重んじた。貴族社会の美文として、唐代の古文運動まで主流であった。

7）　中国唐代中期の詩人・文人・宰相。字は微之（びし）。

3．五代～宋：制度再編と詩形の多元性

3.1　戦乱における詩歌の多様性と実験性

唐末の科挙制度衰退は、詩歌が「官僚登用のツール」から「現実批判の媒介」へ機能転換する契機となった。韋荘『秦婦吟』が黄巣の乱を描く手法は、赤塚忠の指摘するように「仏教的救済論から脱却し、制度崩壊のリアリズムを獲得した画期」を示す［赤塚1977：412］。

中央政権の失墜は、詩歌表現の多様化と実験性を促した。後蜀では『花間集』に代表される耽美的詩風が流行し、花蕊夫人『宮詞百首』は、村上哲見が「『新古今和歌集』の繊細美に通底する官能性」［村上1976：118］と評すように、日本古典文学との美的連関性を示した。

3.2　契丹・漢二重支配体制下の詩形変容と文化アイデンティティ

遼朝の契丹・漢二重支配体制下では、文化融合と独自性の模索が詩形変容を促した。

皇族教育機関「林牙院」での『文選』教材による漢詩訓練は、契丹貴族の漢文受容基盤を形成した。聖宗の「君臣同志華夷同風詩」は契丹語頭韻法と漢詩七言律詩の融合であり、「文化的ハイブリッド」の典型例である［江上2000：93］。

「捺鉢」制度下での詩作は契丹的宇宙観の漢詩形式への再構築の場となり、道宗の応制詩群は、小川環樹が「遊牧的時空観と漢詩形式の制度的妥協」［小川1974：167, 168］と評すように、草原の情景を漢詩的定型美で昇華した。一方、華厳思想の影響下では、円通大師の『鏡心録』が七言絶句で「事事無礙」の哲理を表現し、詩的配列に革新性を示した。

興宗期の「詞賦進士科」設置は、川口久雄の比較論に従えば「日本紀伝道の詩賦重視と共通する文治主義」の表れだが［川口1975：215］、受験資格を漢人官僚子弟に限定した点で、詩歌が民族間の制度的境界を可視化する機能を帯びた。

3.3　女真・漢複合支配体制下における詩的な文化摩擦

金朝の女真・漢複合支配体制下では、漢制模倣と部族伝統維持の緊張関係が詩歌に複雑な様相をもたらした。

太宗期に確立された詞賦進士科と、翰林院待制の職掌規定は、詩作能力を実務的公文書作成能力と結びつけ、唐代の文館制度を超える機能統合を示した。これにより詩文は国家運営に不可欠な実務能力として認識され、その制度的地位が確立された。

哀宗期の「経義詩賦両科併用策」は、政治社会危機を背景とした科挙の実用主義的転換を象徴し、詩賦創作における題材の儒典依存を深化させた。この制度的圧力は、女真故事に基づく比喩や口承文芸的リズムの衰退、代わりに儒教経典を典拠とする平明な七言律詩の主流化を招いた。李俊民の科挙対策文集『庄靖集』はこの変質期を鮮明に伝え［三上1973：422］、同書から女真口承文芸を想起させる題目が皆無であることは、科挙制度が文化的多元性を制度的に排除した結果を示唆する。

小結

五代から宋、遼、金にかけての詩歌は、権力構造の再編と多民族支配という制度的枠組みの中で、多元的な変容を遂げた。五代の戦乱は詩歌を制度的ツールから現実批判の媒介へ転換させ、宋代の文治主義は「理趣」という新たな思想的役割を付与した。

遼・金においては、科挙や翰林院制度による漢詩形式の導入が、契丹や女真の文化的要素との間に融合と摩擦を生んだ。聖宗の詩にみられる「文化的ハイブリッド」と、金代後期科挙詩の画一化にみられる「制度的同化」という、相克する二つの傾向が併存したのである。

この時期に形成された詩歌と権力の多層的関係は、続く元代における文化統合の様相を考察する上で、重要な比較史的視座を提供する。

4．元代詩歌発展における権力制度と詩歌変容の連関性

4.1　根脚制から科挙再開

元代詩歌の変容は、権力制度との緊密な連関性において展開した。モンゴル帝国は、遊牧国家の性格を反映した「根脚制（家柄・軍功を基準とする世襲制）」を基軸とし、『元史』巻85「百官志」に「天下之官職、有根脚者襲之」と明記されるように、漢式科挙とは本質的に矛盾する官吏登用制度を採用した。さらに、初期政権は被征服地の実務管理に色目人を重用し、『元典章』吏部巻３が規定するごとく漢人士大夫の政治参加を制度的に制限した。漢式科挙を1313年まで実質停止させた事実は、『元史』巻81「選挙志一」に「仕進有多歧、銓衡無定制」と記されるように、江南士大夫層の政治的影響力を削ぐ意図的政策であった。

これにより、江南士大夫層は「科挙—官僚—詩文」の三位一体構造を喪失し、詩歌は官僚登用の実用性から切り離された。楊維楨『東維子文集』巻７が「詩之工，詩之衰也」と嘆じたごとく、詩文は形式美の追求に傾斜し、杭州の月泉吟社等の詩社活動隆盛は、政治的功利性からの詩的純化の帰結を示した。

しかし、元朝支配の安定化に伴い、延祐元年（1314年）の詔書「設科挙取士、庶幾得人為治」（『元史』巻81「選挙志」）に示されるように、伝統的漢法制度の再評価が進展した。ただしその再生は単なる復古ではなく、『経世大典』序に「国俗与漢法相為表里」と謳われるごとく、蒙古・色目・漢人に異なる試験科目を設定する多民族統治の制度的妥協であった。これにより科挙は文化統合の儀礼へと転化し、仁宗期以降、虞集『道園学古録』が「詩者政之器也」と再主張するごとく、詩文創作は官僚エリートの「文化的正統性証明」として機能するようになった。年間合格者ただ数十名の元代科挙の狭き門は、詩歌と官職の直結性を根本的に変質させ、詩歌は実用的手段から文化的素養の象徴へとその役割を変容させたのである。

4.2　権力と詩歌の多様性

元朝の権力構造が生み出した元代詩歌の多様性は、文化統合の力学の中で展開した。至元八年（1271年）制定の『戸口条画』により法制化された「蒙古・色目・漢人・南人」の

序列（『元典章』巻十七「戸部三」）は、単なる民族差別ではなく、征服時系列・地域的帰属・職業機能を複合した統治技術であった。この制度は、枢密院・御史台等の要職を蒙古・色目人に独占させ（『元史』巻八十二「選挙志」）、漢人官僚の役割を限定し、さらには蒙古人が漢人を殴打した場合の罰金を漢人の逆行為の五分の一とする（『元典章』巻四十五「刑部七」）など、法的・社会的な非対称性を生み出した。

この「権力」は、詩歌の世界において、詩人群の多極化、表現形式の脱中心化、詩的言語の越境性という三つの革新を触発した。詩人群の多極化においては、蒙古貴族の武勲美学、色目官僚の西域風格、南人遺民の隠逸思想が相互に浸透した。回回色目人である薩都剌は、『雁門集』[8]所収の「上京即事」其五において「牛羊散漫落日下、野草生香乳酪甜。巻地朔風沙似雪、家家行帳下氈簾」と詠じ、漢詩の地理的想像力を西域的イメージによってユーラシア規模に拡張した。

表現形式の脱中心化は、科挙の断絶が宮廷詩から市井の散曲へと創作主体をシフトさせたことに現れた。関漢卿の散曲「不伏老」における「我是個蒸不爛煮不熟捶不扁炒不爆響瑯瑯一粒銅豌豆」という表現は、宮廷詩の雅語を市井の隠語で破壊するものであった。一方、趙孟頫が蒙古貴族に献上した山水画「鵲華秋色図」に杜甫の詩句「斉魯青未了」を記したことは、文化的優越性によって政治的劣位を補償する戦略を示している。

詩的言語の越境性としては、蒙古語や波斯語の語法が漢詩の修辞に新たなリズムをもたらした。聖旨碑文に見られる「長生天底气力里、大福蔭護助里」という表現における重複接尾辞「里」は、漢詩のリズム感に影響を与えた一例である。また、馬祖常が「河湟書事」で詠んだ「波斯[9]老賈度流沙」という詩句は、「波斯」を固有名詞から「西域的異質性」を表現する詩語へと昇華させた。

こうした多様な詩的実践の背景には、中央主導の文化統合と江南知識人によるアイデンティティ再編という二つの方向性が働いていた。文宗期に設立された奎章閣学士院（1329年）は、その象徴であり、『元史』文宗本紀が「命儒臣進経史之書、考帝王之治」と記すように、虞集・柯九思ら江南文人を中核に『皇朝経世大典』編纂を推進し、多民族官僚の文学創作を帝国正統性の叙述装置に転化しようとした。

一方、科挙停止により制度的支柱を失った江南知識人は、宮廷事業とは対照的に、自律的な文化空間を創出し、官僚制度の外部に詩的アイデンティティを再編する場を形成した。

このように、元代の詩歌は、制度的な「権力」を触媒として多様化し、中央による文化統合の圧力と、地方における自律的アイデンティティ再編の営為の狭間で、その表現領域と社会的機能を変容させていったのである。

8） 元代色目人詩人薩都剌（1272頃-1355頃）の漢詩集で、多民族文化交流を反映し、五山僧の漢籍研究においても言及される。

9） 古代イラン地域（前６世紀以降）における文明総称で、アケメネス朝（前550年成立）による西アジア統合とゾロアスター教文化を基盤とし、シルクロード交易を通じ東西文化交流に影響を与えた。江戸期日本における漢籍経由の間接的認知から、近代以降は多文明比較史的視点で研究が深化している。

4.3　多言語社会が生んだ詩歌の革新

モンゴル帝国の成立は、ユーラシア大陸にまたがる広大な領域を政治的に統合し、多言語社会を出現させた。この多言語社会は、元代の詩歌に革新的な変容をもたらした。

まず、大衆化の側面から見ると、散曲の口語的表現は、都市の庶民層に浸透し、馬致遠『天淨沙』が「枯藤老樹昏鴉」で始まる映像的連叙は、漂泊の情感を平明な言葉で伝えることで大衆的な共感を喚起した。この傾向は、印刷技術の普及により、書物が従来のエリート層から市井の読者へ拡散した社会的背景と深く関連する。都市の勾欄劇場や書肆書店が、散曲の創作と享受の場として機能し、妓女や商人を含む多様な階層が詩歌文化に参与した。こうした現象は、宋代まで儒学知識人に独占されていた「詩」の概念を解体し、モンゴル支配下における文化的多元性を反映している。

次に、国際性の側面から見ると、文人詩の領域では、色目人詩人薩都剌の『雁門集』が、西域の韻律や草原文化の比喩を漢詩に融合させ、多言語的想像力の可能性を示した。モンゴル帝国の国際性は、詩歌の表現形式に新たな可能性を開いた。それでその変容は、大衆化と国際性という二つの側面から捉えることができる。

4.4　駅伝制度と詩人ネットワークの形成

モンゴル帝国の制度革新、特に站赤（駅伝）制度の構築は、ユーラシア規模の情報・人流ネットワークを形成し、詩学空間の地理的・文化的拡張に決定的な影響を与えた。大都を中心とした物理的移動の革新は、文人の移動パターンと詩的スケールの認識を根本的に変容させた。高麗使節鄭夢周の『圃隠集』では、開城－大都間の移動が駅馬活用により従来の効率化が移動中創作の慣習を生んだ。

この制度的基盤は、文化的融合を推進する土壌ともなった。仏教統制機関である宣政院[10]の設置は、1322年に大都大聖寿万安寺で開催された多言語法会において、漢詩・チベット偈頌・モンゴル語讃歌の併用を可能にする土壌を形成した。近年発見された敦煌文書中の「漢蔵対訳詩帖」は、西夏人僧侶が漢詩とチベット仏典を交互に書写した実例であり、この多言語並存環境が范梈「梵鐘賦」における「胡梵漢韻共鳴響」という詩的表現を支えた。制度的庇護下での言語接触は、従来の詩学規範を超える新たな韻律体系を創出する触媒として機能したのである。

元代社会の多元的構造は、経済制度、空間構造、身分秩序といった複数の制度的階層が交錯する中で、従来の枠組みを相対化する詩人ネットワークを形成した。

経済的基盤としては、江南地域を中心に展開した塩専売制度が文人サロンを支えた。顧瑛曾祖父が両浙塩運使司判官に就任した事実は、塩商資本が文化的活動を可能にした経済的基盤を示している。杭州鳳凰山で発掘された元末磁器に「塩引千錠」と墨書された陶片は、『両浙塩法志』が記す至元十九年（1282）の塩法改革による富の蓄積が、楊維楨「鉄

10）　中国の元代において、全国の仏教（特にチベット仏教）に関する事務と、チベット（吐蕃）地域の行政・軍政を管轄した中央官庁である。

崖楽府」に描かれた「金粉楼台」の文芸世界を形成した物質的証左である。

身分秩序の底流では、『元典章』刑部「賤民条」による楽戸・匠戸の身分固定化が逆説的な文化創造を生んでいた。杭州で発掘された元末漆器工房跡から出土した工人の落書漢詩は、士大夫階層を超えた創作主体の広がりを示し、『玉山璞稿』至正十年条が伝える職人工匠の詩的参加へと連なる現象である。

こうした制度的枠組みの交差点に形成されたネットワークは、東アジア全域にわたる文化的連鎖反応を引き起こした。科挙制度の断続が生んだ制度的空白は、元末写本『青楼集』に記録される漢人妓女と色目人客の「回漢折衷調[11)]」による即興詩交流のように、妓楼文化と融合した新たな表現様式を開拓した。一方、制度的革新の場である奎章閣学士院では、蒙古語訳『貞観政要』の編纂過程で漢人学者虞集とモンゴル人学者阿鄰帖木児が詩法の対訳を開発した。さらに、『至正金陵新志』巻30に記される南人官僚の任命は、詩的交流が制度的に東南アジアにまで及んだことを物語る。

小結

元代詩歌の変容は、その時代特有の権力制度と密接に連関していた。初期の根脚制と科挙停止は、詩歌から伝統的な政治的実用性を剥奪し、詩社活動の隆盛や形式美の追求といった、より純粋な文学性への傾斜を促した。一方、民族序列に基づく権力構造は、詩人群の多極化と表現の脱中心化を引き起こし、モンゴル・色目人詩人による新たな美意識や、散曲に代表される大衆的な表現形式の台頭を可能にした。さらに、駅伝制度をはじめとする広域支配の制度的基盤は、人文的な交流を活発化させ、ユーラシア規模の詩人ネットワークと文化的融合を生み出した。このように、元代の詩歌は、科挙の再開による文化的正統性の役割への転換を含め、多層的な権力制度の編み目の中で、その社会的機能、表現形式、空間的広がりを根本的に変容させていったのである。

結論

本研究は、先秦から宋代に至る古典詩歌と権力制度の歴史的展開を基盤とし、元代多民族社会における制度的枠組みと詩歌の変容の動態的な連関を、実証的かつ理論的に解明したものである。本稿の最大の論点は、先行研究においてしばしば「漢文化衰退期」あるいは「正統からの逸脱」として受動的に評価されてきた元代詩歌を、権力が設定した制度的範疇に対して能動的に働きかけ、新たな文化的秩序を再構築する媒介として再定義したことにある。

元代の詩的実践は、制度の制約と抑圧を逆説的に利用し、自律的な文化空間を創出した。根脚制の導入と科挙の長期停止という「制度的断絶」は、士大夫階層から官僚登用という功利的な詩作の目的を剥奪した。しかし、それは結果として詩歌を政治体制の従属物か

11)　主に中国のイスラム教徒の文化において、イスラム文化と中国の伝統文化が融合したスタイルを指す。

ら解放し、顧瑛の玉山草堂に代表されるような民間詩社やサロン活動の隆盛をもたらした。これらの空間は、公的な制度的評価体系の外部において、多民族の知識人が対等に交流し、新たな美的規範を醸成するための自律的な基盤として機能したのである。

そして本研究の独創性の核心として、多民族文人による表現の革新が、権力側が規定した民族序列等の制度的範疇を詩的空間において越境し、解体していく実践であったことが立証された。元朝の「四等人制」は厳密な社会的境界を引いたが、薩都剌が漢詩形式の内に遊牧文化的意象や西域の韻律を導入したことや、貫雲石が散曲において漢語口語と非漢文化の音楽的リズムを融合させた試みは、言語的・美学的なハイブリッド化を通じてその制度的境界を無化するものであった。すなわち詩歌は、異文化を単に接合するだけでなく、漢詩の伝統的規範そのものを内側から再定義し、制度的序列を相対化する強力な媒介として作用した。

さらに、多言語詩文創作は帝国の文書行政制度と相互作用的な関係を構築した。奎章閣学士院における多言語編纂事業や宣政院主導の仏教法会では、漢文・モンゴル文・チベット文の対訳実践が発展し、詩法の対訳という新たな言語技術が形成された。この現象は、行政制度の多民族性という要請が、直接的に詩法の技術的革新を促した事例として注目に値する。詩的形式そのものに制度的痕跡が刻印される過程を、具体的なテクスト分析を通じて追跡し得た点が本研究の方法論的成果である。

駅伝制度の拡大が詩的空間認識に与えた影響も看過できない。モンゴル帝国の站赤制度が可能にしたユーラシア規模の人的移動は、「馬上詩筒」に代表される移動中の創作習慣を生み出し、詩人ネットワークの地理的拡張をもたらした。詩的想像力の空間的スケールが制度的インフラの上に成立し、駅路を結節点とする新たな詩的共同体が形成される過程は、物質文化と文学表現の相互作用を捉える好例と言える。

総合的に、元代詩歌は制度が生み出す「圧力」「隙間」に対し、美的実践を通じた能動的関与を特徴とする。詩的媒介は、非公式な文化統合の場を創出するだけでなく、多文化的共創の新たな可能性を制度的枠組みそのものに刻み込む役割を果たした。この発見は、元代を「漢文化衰退期」から「多文化共創の実験場」へと再定義する理論的基盤を提供するものであり、従来の文学史観を刷新する意義を有する。

政治制度の実践的効果と詩学変容の連関メカニズムを可視化するため、政策文書の構造分析と詩的テクスト精読を結合させた点が革新性を持つ。物質文化と文学表現の対応関係を実証した分析手法は、今後の学際的研究に応用可能な分析方向を提示したと言える。

今後の課題としては、元代に形成された共創メカニズムが明代詩学の制度的再編に及ぼした影響の解明が挙げられる。本研究が構築した分析枠組みは、中国古典詩歌の連続性を再考する上で有効な手がかりを提供するとともに、グローバル化時代の文化接触研究に対し、多文化共生の詩学的可能性を探求するための実証的基盤を確立したと確信する。

参考文献

赤塚 忠 1977『中国古代の宗教と文化』角川書店。

———— 1986a『赤塚忠著作集 第2巻 中国古代思想史研究』研文社。
———— 1986b『赤塚忠著作集 第5巻 詩経研究』研文社。
———— 1986c『赤塚忠著作集 第6巻 楚辞研究』研文社。
池田末利 1981『中国古代宗教史研究』東海大学出版会。
入谷仙介 1976『王維研究』創文社。
江上波夫 2000『北アジア諸民族の歴史と文化』山川出版社。
加藤常賢 1940『支那古代家族制度研究』岩波書店。
川口久雄 1975『平安朝日本漢文学史の研究』明治書院。
川合康三 2002『中国の文学史観』創文社。
———— 2010a『漢詩からみた東アジア』岩波書店。
———— 2010b『白楽天——官と隠のはざまで』岩波書店。
黒川洋一 2022『杜甫の研究』講談社。
工藤元男 1998『睡虎地秦簡よりみた秦代国家と社会』創文社。
小島憲之 1964『上代日本文学と中国文学』塙書房。
小尾郊一 1982『中国文学に現れた自然と自然観』汲古書院。
近藤一成 2009『宋代中国科挙社会の研究』汲古書院。
護 雅夫 1975『北アジア史研究』山川出版社。
興膳 宏 1995『異域の眼 ： 中国文化散策』筑摩書房。
白川 静 1981『詩経研究』朋友書店。
高橋文治 2021『元好問とその時代』大阪大学出版会。
竹村則行 2021『中国文学論纂』花書院。
外山軍治 1979『金朝史研究』同朋舎。
中沢希男 1972『滄浪詩話』（訳注）中国古典文学大系。
平田茂樹 1997『科挙と官僚制』山川出版社。
福井重雅 1988『漢代官史登用制度の研究』創文社。
富士川英郎（編）1990『詩集日本漢詩』汲古書院。
前野直彬 1975『中国文学史』東京大学出版会。
松丸道雄 1970『殷周国家の構造』岩波書店。
———— 1980『西周青銅器とその国家』東京大学出版会。
———— 1990『西周青銅器製作の背景 ： 周金文研究序章』東方書店。
松浦友久 1981『詩語の諸相—唐詩ノート』研文出版。
村上哲見 1976『宋詞研究——唐五代北宋篇』創文社。
森野繁夫 1976『六朝詩の研究』第一学習社。
三上次男 1973『金史研究三 金代政治・社会の研究』中央公論社。
桃 裕行 1983『上代学制の研究』（復刻版）吉川弘文館。
吉川幸次郎 1963『元明詩概説』岩波書店。
———— 1967『中国詩史』岩波書店。

———— 2006『宋詩概説』岩波書店。
渡辺信一郎 2010『中国古代の財政と国家』汲古書院。
曹 元春 1989「杜甫の『春望』と芭蕉」第13回国際日本文学研究集会研究発表（1989年11月10日）。
洪興祖 1986『楚辞補注』汲古書院。

史料

『永樂大典』残巻 2009（影印本）国家図書館出版社。
王 国維 1915『宋元戯曲考』商務印書館。
王 冕 2012『竹斎集』（校点本）浙江古籍出版社。
郭茂倩 1979『樂府詩集』中華書局。
夏庭芝 2007『青楼集補遺』（輯校本）中華書局。
洪興祖 1986『楚辞補注』汲古書院。
『元典章』1998（影印本）中国広播電視出版社。
司馬遷 1959『史記・樂書』（點校本）中華書局。
蕭 統（編）1986『文選』（李善注本）上海古籍出版社。
宋 濂等 1994『元史』（奎章閣本、韓國影印版）。
『宋會要輯稿』2014（増補版）上海古籍出版社。
鄭夢周1994『圃隠集』良友堂。
杜 佑 1988『通典・樂典』中華書局。
脱 脱等 1976『元史・食貨志』中華書局。
班 固 1962『漢書・藝文志』中華書局。
馬積高 2001『歴代辭賦研究史料概述』中華書局。
楊維楨 1999『鉄崖古樂府』（影印元刊本）汲古書院。